

[課題演習概要]

学習者の自己調整学習実現を目指して

—音楽科授業実践を通して—

新保和典

Kazunori NIIBO

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻教育実践力開発コース
教職教育高度実践力プログラム

(2024年1月10日受理)

キーワード：質的研究、自己調整学習、動機づけ、学習方略、メタ認知、ボディパーカッション

1 研究の目的

本研究は、音楽科授業実践において、学習者が自己調整学習を実現していく姿を、質的な授業分析を通して明らかにすることを目的とする。

2 研究の計画

M1前期では「自己調整学習」に関わる先行研究の調査を行った。M1後期では鑑賞分野、M2前期では歌唱分野、M2後期では創作分野で「自己調整学習」の実践・分析を行った。

3 研究の内容

(1) 先行研究

「自己調整学習」は Zimmerman によって提唱された学習理論である。Zimmerman (1989)では、自己調整を「学習者が自身の学習活動に能動的に関わり、自ら学習を調整する学び方」とし、動機づけ、行動(学習方略)、メタ認知の関連を重視している。草間(2023)は、『AI時代において、人工知能には代替不可能な人間としての強みである「創造性」や「人間性」を生かし、(中略)「自己調整」しながら課題解決を図る人材がよりいっそう求められる』と述べている。昨今の社会情勢において、自己調整の必要性について主張している。OECD「Education2030」のラーニ

ングコンパスにおいて「AARサイクル」が示されているように、自己調整は予測困難な時代を生き抜くために求められているコンピテンシーであり、学校教育でも育まれるべき力である。McPherson & Zimmerman (2011)では、演奏を習得するために自己調整が必要となると述べており、音楽科の学習過程と「自己調整学習」との親和性の高さをうかがうことができる。

しかしながら、音楽分野における「自己調整学習」に関わる研究は、管見の限り演奏を専門とする熟達者を対象とした実践しか見られなかった。今後進められる音楽分野での「自己調整学習」に関する研究は、個々の学習者が「どのような調整を行ったか」を質的に捉えることが求められる。従って本研究では、音楽科において学習者が「自己調整学習」を行う過程を捉え、その有効性を明らかにしたい。

(2) 授業実践

単元名	ボディパーカッション
実践日	令和5年11月15日
主眼	音楽に自身で創意工夫を加えるボディパーカッションを通して、音楽を身体全体で表現し楽しむことができる。

(3) 授業分析・考察

123. A : これか、(リズムを指して) 1番と一緒。1と3にする??
124. B : それか3。 (それぞれのリズムを叩いて確認する)
125. A : こっちのほうが好き、3の方が。

126. B : ああ, 3。(3番のリズムを叩いて確認する)
 127. A・B : 2人でリズムを叩いて確認する(Bはスムーズに叩けない)
 128. A : それかBさんこっちの方が簡単?? 2番の方が簡単?? じゃあ2番にしよう。

ここでは生徒A, Bが, 学習プリントに難易度の異なる5つのリズムを用意した中から, 自分たちのたたくリズムを選択している。126,127の生徒Bから, 演奏するリズムを決定する際に試行錯誤している様子が分かる。特に3番のリズムを演奏することは難しかったようであり, そのため, 128.Aの「こっちの方が簡単??」と難易度の調整を提案している。このやりとりから, 自分たちの演奏能力を「メタ認知」的に捉え, 選択に活かしていること推察できる。その後A, Bは自身にとって最適な難易度のリズムを選択し, グループで何度も合わせている。このように異なる難易度の選択が, 生徒たちの自己決定を促すための「学習方略」として機能し, その後のグループ活動が「振り返り」を促進させていることが分かる。

171. A : じゃあさじゃあさ, なんか同時にみたいなやつさ, なんか向こう(隣のグループ), みんな一緒だけどリズムは途中で変わった。
 172. D : ああ。
 173. A : やってみよう。で, どこでリズムを変えるか。(中略)
 180. A : 「忘れてしまって」からより前はみんなでする。いい??これ(リズムを指しながら)をみんなでしたあと, 「忘れてしまって」からは分かる。よし, やってみよう, 今の聞いてた??
 181. E : 頷く
 182. A : よし, やってみよう。→音楽を流す
 183. A : 最初から。
 184. A~E : 4人で曲に合わせて演奏

この場面は, グループ同士でボディパーカッションの交流を行った後の談話である。171,173.Aの発言から, 隣のグループの行っていたアレンジを自分たちのグループにも取り入れようとしている。グループ交流によって, 他のグループのアレンジに興味をもち, 生徒Aたちのグループの挑戦意欲を喚起したと考えられる。その意欲が, 180.Aにあるような創意工夫につながったと言えよう。これは, 音楽的にも大変意義深い姿である。パフォーマンスにアレンジを加えるというこの挑戦意欲から, 「動機づけ」を確認でき, 同時に音楽科と「自己調整学習」の親

和性の高さが表れた場面と捉える。

以上, 「自己調整」を構成する要素とそれらを循環的に学習に取り込む姿が音楽科の創作活動を通して確認できた。

4 成果と課題(○成果, ●課題)

○ 生徒たちがよりよい演奏をつくりあげようと「自己調整学習」に取り組む姿から, 音楽科の創作課題と「自己調整学習」との親和性の高さを立証することが出来た。創作課題であるボディパーカッションが「自己調整学習」を促進する要因になったと考えられる。

加えて, 音楽科の創作活動において「自己調整学習」の要素を具体化できた点から, 創作活動を行うことのできる音楽科に「自己調整学習」の適正があると考えられる。

● 生徒の主体的な学びである「自己調整学習」を阻害する要因を明らかにする必要がある。阻害要因は, 授業者の不必要な発言, 環境要因, 学習デザイン等, 学級集団によって異なる。実践課題と結びつくが, 阻害要因に対して授業前に備えておくことが授業者には求められる。それを事前に整理することが, 自己調整を促進することにもつながるだろう。

また, 音楽科で培った自己調整能力を他の場面でも応用させていくことが課題となる。音楽科で自己調整能力を高めたとしても, それを生活場面で役立てることに意味がある。音楽科で高めた力を, 他の場面に役立てるためのはたらきかけを今後も考察を深め, その具体的な手立てを検討していく。

主な引用・参考文献

- Barry J Zimmerman (1989) A Social Cognitive View of Self-Regulated Academic Learning
 McPherson & Zimmerman (2011) Self-Regulation of Musical Learning
 OECD Future of Education and Skills 2030 project —OECD Learning Compass 2030—
 草間 啓(2023) AI時代を主体的・共創的に生き抜く生徒の育成—自己調整, 創造性, 人間性に着目して—